

『正法眼蔵』『陀羅尼』巻にみる道元禪師の理念と作法

石 原 成 明

はじめに

『正法眼蔵』『陀羅尼』巻は長い『正法眼蔵』研究史の中に於いて、あまり注目されることなく今日に至っている。この要因として本巻が持つ性質上、思想的な視点からの考察対象として捉えられず、作法の説示、また清規の一つとして捉えられたためと考えられる。先行研究にも、本巻に注目した研究は少なく、またそのいずれも作法の説示、清規として本巻を取り扱う傾向にある。本論文の目的は道元禪師の陀羅尼観を明確にし、本巻に示された作法との関係性を考察することにある。

道元禪師の陀羅尼観

道元禪師は『正法眼蔵』を通じていかなる陀羅尼観を展開されているのか。以下の「恁麼」巻の説示に着目する。

しかあるを、仏道の嫡嗣に学きたれるには、無上菩提正法眼蔵、これを寂靜といひ、無為といひ、三昧といひ、陀羅尼といふ。

印度學佛教學研究第五十八巻第一号 平成二十一年十二月

「恁麼」(春秋社『道元禪師全集』(以下『全集』)第一巻 二〇七頁)「陀羅尼」を「無上菩提正法眼蔵」、「寂靜」、「無為」、「三昧」と同義とする表現である。これより禪師にとって「陀羅尼」とは、いわゆる「神秘的な力を持つと信ぜられる呪文」といった一般的な解釈を脱した概念であることがわかる。また「三昧」と「陀羅尼」を並記し、同等の価値として表現されることは『正法眼蔵』各巻に散見され、禪師が陀羅尼を表現する際の一つの特徴といえよう。では「陀羅尼」巻ではどのような示されているのか。

参学眼あきらかなるは、正法眼あきらかなる。正法眼あきらかなるゆえに、参学眼あきらかなることをうるなり。この関縁を正伝すること、必然として大善知識に奉観するちからなり。これ大因縁なり、これ大陀羅尼なり。

「陀羅尼」(『全集』第二巻 三二頁)

ここでは、「大善知識に奉観するちから」が「大因縁」、また「大陀羅尼」と定義されている。また、この「大善知識に

『正法眼蔵』『陀羅尼』巻にみる道元禪師の理念と作法（石原）

奉観するちから」とは以下のようにも言い換えられている。

いはゆる大陀羅尼は、人事、これなり、人事は大陀羅尼なるがゆえに、人事の現成に相逢するなり。

「陀羅尼」（『全集』第二巻 三三頁）

筆者は、この「陀羅尼」を「人事」と表現する記載に着目した。いわゆる「人事」とは僧堂での挨拶であり、『禪苑清規』等にも結夏安居での作法を示す際に、この語が用いられている。道元禪師における人事とは、以下の一文より定義される。

その人事は、焼香礼拝なり。「陀羅尼」（『全集』第二巻 三三頁）

これより焼香礼拝を中心とした挨拶のことを「人事」と位置付け、「陀羅尼」と表現し、「大善知識に奉観するちから」として重視している。先に指摘した「三昧」との並列表記と「焼香礼拝を中心とした人事」の関係性を考察することにより、禪師の陀羅尼観が明らかにされると考える。

人事の作法について

道元禪師における人事とは「焼香礼拝」が中心となるが、その作法に見られる特徴とはいかなるものか。「陀羅尼」巻に示された作法に関しては、小坂機融氏が『道元の著作』講座道元第三巻「第三章 永平清規」に『禪苑清規』との深い関係性を指摘されている。氏の研究より、道元禪師が『禪苑清規』を重用していたことは明白であるが、『禪苑清規』に

おける「人事」の規定と「陀羅尼」巻に示された作法では多くの差異が見られる。紙面の都合上、検証は控えるが、これらの差異はどの經典を基にしたのか、またどのような影響を受けて説示されたものかは、現在の所判然としない。加えて「人事」を「陀羅尼」と同一視するという思想を有した文献は筆者の調べた限り、『禪苑清規』及び他の教典に見られない。道元禪師特有の思想である可能性が考えられる。

また『禪苑清規』では知事や頭首、首座等の進退に関する記載が中心であるのに対し、「陀羅尼」巻では、これらの役職に対する指示ではなく、礼拝の際の焼香や拝に関する手順の指示が中心となる特徴が見られる。

ではこの「人事」と「陀羅尼」を同一視する思想はどのように形成されたのであろうか。

理念と作法との関係性

「陀羅尼」巻後半部には礼拝を重視する淵源が記されているものの、「礼拝」と「陀羅尼」が同一概念であるとする思想的形成過程、及びその由縁は明確にされていない。筆者は「陀羅尼」という言葉が『正法眼蔵』全体に亘って、多く「三昧」と並記される事、『正法眼蔵』「神通」巻と共通する説示が見出される事、道元禪師自身が礼拝を行った際の事例、の三点に着目した。これらから禪師特有の可能性が考えられる

陀羅尼觀の形成過程、また「陀羅尼」という概念と「焼香礼拝」という作法の関係性の考察を行いたい。

先に「陀羅尼」と「三昧」とは並記され、同概念として規定されている事例が多いことを指摘した。禪師における「三昧」の概念を明確にすることにより「陀羅尼」と共通する概念を理解出来よう。禪師における「三昧」とは『正法眼蔵』「三昧王三昧」巻にその定義が顕著に表れている。

あきらかにしりぬ、結跏趺坐、これ三昧王三昧なり、これ証入なり。一切の三昧は、この王三昧の眷属なり。

「三昧王三昧」(『全集』第二卷 一八〇頁)

禪師における「三昧」とはまさに「結跏趺坐」に代表される修行である。ここからは、いわゆる修証一如とよばれる坐禪觀が読み取れる。「三昧」という概念が修行である以上、「陀羅尼」も「王三昧の眷属」としての修行と規定されていると考えられる。先に「陀羅尼」の具体的作法として「焼香礼拝」が挙げられる事を指摘した。よって「焼香礼拝」という行為も修行と位置付けられると考える。「焼香礼拝」が修行と定義されれば、行ずる者は必然的に覺者と規定されよう。

次に、筆者の考える「神通」巻との関係を明らかにしたい。

「陀羅尼」巻には「神通」巻と類似した説示が見られる。

しかあればすなはち、擎茶来・点茶来、心要現成せり、神通現成せり。盥水来・瀉水来、不動著境なり、下面了知なり。

『正法眼蔵』「陀羅尼」巻にみる道元禪師の理念と作法(石原)

「陀羅尼」(『全集』第二卷 三二頁)

三つの因縁を基にした一節であるが、いずれも日常底における悟りの現れを説いた因縁を選別して挙げられている。これら因縁は『正法眼蔵』中において神秘的な力への啓蒙を否定された「神通」巻、「王索仙陀婆」巻にも引用されていることから、神秘的・非現実的な力の否定という共通点が見られる。「陀羅尼」も「神通」も一般的には神秘的、非現実的な力への信仰を掲揚するものであるが、これらを一度否定し、日常底の修行生活こそを尊ぶ思想への展開がなされている。最後に、道元禪師が焼香礼拝をした事例は「面授」巻に記載されている。

大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元、はじめて先師天童古仏を妙高台に焼香礼拝す。(中略) 仏祖祖面授の法門、現成せり。

「面授」(『全集』第二卷 五四頁)

天童山にて行われた、道元禪師と如浄禪師との相見の化機を表現した一節である。この相見面授の重要性は同巻に以下のようにも示されている。

釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつり、釈迦牟尼仏の仏眼をわがまなこにうつしたてまつり、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし、仏眼睛なり、仏面目なり。(中略) この正伝面授を礼拝する、まさしく七仏釈迦牟尼仏を礼拝したてまつるなり、迦葉尊者等の二十八仏祖を礼拝供養したてまつるなり。仏祖の面目・眼睛、かくのごとし。

『正法眼蔵』『陀羅尼』巻にみる道元禪師の理念と作法（石原）

「面授」（『全集』第二巻 五六頁）

この相見面授という行為の重視こそが、「陀羅尼」巻の冒頭部に示された「大善知識に奉観するちから」と捉えられるのではなからうか。

以上より、道元禪師にとつての「陀羅尼」とは、神秘的・非現実的なものへの信仰を棄却し、正師のもとで行じられる日常底の修行行為を重視する表現であり、加えて叢林での修行生活を行じる事が、覚者として十分な条件を備えたものであるという思想が、禪師の陀羅尼観の形成の母体となったのではなからうか。道元禪師が作法を重視されたことは、「洗淨」巻に示された「作法、これ宗旨なり、得道、これ作法なり。」という曹洞宗門においてあまりに有名な一説からも明らかであるが、「大修行」巻にも以下のように示されている。

仏祖の児孫としては、仏祖の法儀をおもくすべきなり。（中略）この日本国のごとくは、仏儀祖儀あひがたく、ききがたかりしなり。而今まれにもきくことあり、みることあらば、ふかく髻珠よりもおもく崇重すべきなり。

「大修行」（『全集』第二巻 一九一頁）

このことから、礼拝という行為に綿密なる規定を設けることで、作法自体を仏儀として昇華し、これを行じること自体を仏行とする思想へ誘導しようとした可能性が考えられる。

まとめ

以上考察を行ってきたわけであるが、本論文の目的であった理念と作法の関係性に関する筆者の卑見を述べたい。

まず道元禪師における「陀羅尼」の理念として、一、いわゆる悟りとしての表現と同義の意味を持つ。二、「三昧」と並列に用いることで、「三昧」と同等の重要性を有するものである。三、「大善知識に奉観するちから」として重視し、その具体的作法として焼香礼拝に代表される「人事」がある。また「人事」が「陀羅尼」であるとする思想も『禪苑清規』をはじめ、発表者の調べた限りでは他の教典には見られない。道元禪師特有の思想である可能性が考えられる。本発表の趣旨である理念と作法との関係性であるが、禪師は「陀羅尼」をいわゆる悟りとして表現するも、神秘的・非現実的なものへの啓蒙を棄却し、その悟りの表現方法を正師のもとで行じられる、日常底の修行生活としたと考える。その修行生活において、一定の規範を設けることにより、作法自体を仏儀として昇華し、行ずる者を覚者とする思想を「陀羅尼」巻にて表現したものでなからうか。

〈キーワード〉 道元、『正法眼蔵』陀羅尼、作法

（駒澤大学大学院）